

# S-AD NEWS LETTER

## SUMMER COMES!

いよいよ夏が近づいてきています。学生にとって夏休みという期間は、自分の自由を満喫できる気分になり、一年で最も楽しみな時期でもあります。そんなこの夏をどう過ごすか、どんな時間にしていくべきか、みんなで考えてみましょう。



## 「われ思う、ゆえにわれあり」

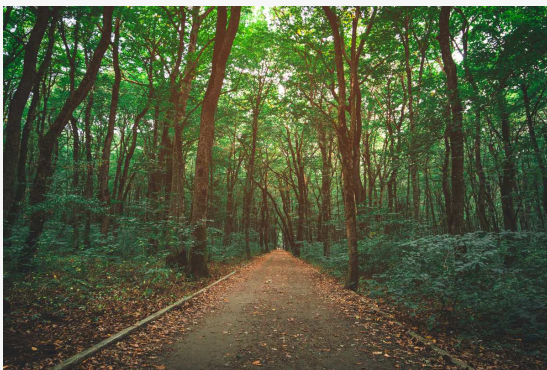


この言葉を聞いたことはありますか？歴史上もっとも名の知れた哲学者のひとりである、フランスの哲学者「ルネ・デカルト」が発した、あまりにも有名な言葉です。彼は「すべてを疑う」ことを徹底し、そのことが近代哲学の始まりであると言われています。「方法序説」(1637年)という本の中で、最終的に疑う余地のない明晰な真理に到達するまでの探求と思索を自伝的に著し、その本の中で残した言葉がこれです。

彼の姿勢は「ほんの少しでも疑いをかけうるものはすべて疑い、自分の判断から排除すべきだ」というものでした。彼が生きた17世紀は、まだキリスト教が支配する神学的世界観のもとで、誰もがものごとを考えていた時代です。魔女がいると言われればみんなで魔女狩りをしたり、コペルニクスやガリレオの地動説が疑われたりする時代でした。そうした時代にデカルトは、あらゆるものを疑って、疑って、疑い続けた最後に、確実に疑えないものがあることに気が付きました。それが「あらゆるものを疑っていても、そう疑っている当の私の存在は疑えない」ということでした。私の存在を否定したら「疑う」行為すら成り立たないことに気づいたのでした。

デカルトはこの本の前半で、この真理に到達するまでの自分を振り返っています。この哲学的命題に到達するまで自分はどのような知的態度をもって生活してきたのか。いまだ確実な判断の根拠を手にしていないこの状況で、どう考え、どう生きていけばいいのか。デカルトはいくつかの格率（ルール）を自分に課したと述べています。そのうちの2つを今回は紹介したいと思います。

## 「森の比喩」



私の第二の格率は、自分の行動において、できる限り確固として果敢であり、どんなに疑わしい意見でも、一度それに決めた以上は、きわめて確実な意見であるときに劣らず、一貫して従うことだった。この点でわたしは、どこかの森のなかで道に迷った旅人になった。旅人は、あちらに行き、こちらに行きして、ぐるぐるさまよい歩いてはならないし、まして一か所にとどまってもいけない。いつもおなじ方角に向かってできるだけまっすぐ歩き、たとえ最初おそくただ偶然にこの方角を選ぼうと決めたとしても、たいした理由もなしにその方向を変えてはならない。というのは、このやり方で、望むところへ正確には行きつかなくても、とにかく最後にはどこかへたどり着くだろうし、そのほうが森の中にいるよりはたぶん「まし」だろうからだ。  
(谷川多佳子訳・岩波文庫)

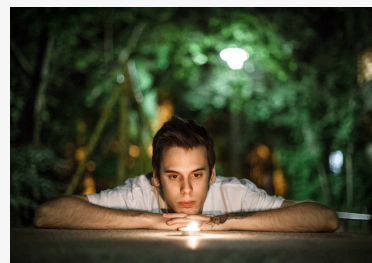
デカルトが自分に課したルールは「**どんなことであっても、一度決めたことは一貫して最後までやり遂げよう、本当にこれでいいのか、他にいい道があるのではないかと途中迷うことがあったとしても、決めた方向に真っ直ぐ進むことが大切だ**」ということです。私たちの人生は、小さなことまで含めて、決断の連続で、結果は不確実なことばかりです。しかしそれでも私たちは行動し、自分の森を歩いていかなければなりません。またこの格率の素晴らしいところは、最後まで突き進むことの大切さに加え、**最終的に自分の望むところへ「正確には」行きつかないこともあるけれど、最後に必ず何かを得られる、そのことは森で迷い続けることよりも大いに価値がある結果を得られる**という点です。

なかなか深い話ですよ。何かを頑張ろうと思えば思うほど、同時に迷いも生じるものです。この格率は、迷って右往左往するのではなく、一貫して最後までやりきるという知的態度が重要であるということを教えてくれています。

デカルトは、これに加えて次のような三つ目の格率を自分に課したようです。

## 「自分と対峙する」

私の第三の格率は、運命よりもむしろ自分に打ち克つように、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように、つねに努めることだった。そして一般に、完全にわれわれの力の範囲内にあるものはわれわれの思想しかないと思えるように自分を習慣づけることだった。  
(谷川多佳子訳・岩波文庫)



解釈が難しくなってきたかな。そんなときは何度も言葉を読み返し、自分なりに意味を考えてみましょう。前半の「自分に打ち克つ」とはどういうことでしょうか。何か不都合なことが起きた時「人がこう言ったから」や「社会が悪いから」などと嘆いたところで、何ひとつ変わりません。もし自分の状況や環境に不満を感じているとしたら、人のせいや社会環境のせいではなく、**その環境下で「どうすべきかを考えられなかった自分の問題」であると考えるべきだ**とデカルトは言っています。自分の取り巻く環境は簡単には変わりません。だからこそ、その状況を変えるために、自分から行動し、その状況に働きかけるために「まず自分のやり方・考え方を変える」しかないのです。それが自分の思想であり、その思想に基づいて起こした行動が「完全にわれわれの力の範囲内にあるもの」ということです。これが「自分に打ち克つ」ということなんですね。自分にとって納得のいく未来を、自分で切り開いていくために必要な知的態度を、何百年も前のデカルトはわれわれに示唆してくれています。「われ思うゆえにわれあり」で有名なデカルトですが、この夏に、森で迷いそうになったら、彼の言葉を思い出してみてもいいでしょうか。  
(参考文献「名著ではじめる哲学入門」萱野稔人・NHK出版新書)



## 「メタ認知プレゼンテーション(二者面談)」を実施します

今年度、新たな試みとして、中学2年3年S-ADの生徒対象に二者面談を実施したいと考えています。普段の学習状況をよく知るS-AD担当教員による面談を行うことで、一人ひとりに合った学習サポートができればとの企画です。また、普段時間がなくてできなかった質問や相談があれば、これを機に話をしてください。面談を通じて1学期の振り返りをするとともに、今後の学習や成長に役立てる機会したいと思います。

日時：7月27日～29日の希望日の午後

27日, 29日はS-ADメンバーとの合同学習会を実施

方法：事前に各自が準備したプレゼン資料を作成し、5分程度プレゼンをする（1学期を振り返って/現在の状況など）

プレゼン資料のテンプレートをClassroomで配信し、提出する

プレゼンは、教科担当の先生の前で行う

プレゼン終了後、教科担当の先生とそれぞれ二者面談を実施する。時間は20分程度

プレゼンを待っている間はS-ADメンバーとともに学習会を実施。学習会では、勉強の教え合い以外にも、各種コンテストの準備も行い、互いに高め合う雰囲気醸成する

1学年は希望制で学習会に参加可能とする（ただし1日は希望すること）

その他：面談終了後、Classiにて振り返りを行い、共有する

\*場所は現在調整中



自分の時間を成長のために使い、充実した夏休みになるよう、先生たちも仲間もみんな君たちを応援しています！  
「辛いときが、伸びるとき！」